

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：44412

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12383

研究課題名（和文）医療ニーズの高い子どもや家族「参加型」の訪問看護サービスの質評価指標の開発

研究課題名（英文）Development of a quality Indicators for home-visit nursing services for children with medical complexity and their families

研究代表者

阪上 由美（SAKAGAMI, Yumi）

大阪信愛学院短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：60711512

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、医療的ケア児と家族に対してより良い支援ができるために、DonabedianのSPO概念枠組みに基づいた訪問看護事業所のサービス質評価指標（HNQIC）の開発を行うことを目的とする。研究の第一段階は質評価指標項目の抽出とその有用性をデルファイ法で検討し、第二段階は質評価指標の信頼性・妥当性の検討を質問紙調査で行った。結果、「ストラクチャー」「プロセス」は5因子28項目の構造となり、「アウトカム」は3因子7項目の構造となった。HNQICは、より良い支援ができるためのケア効果を客観的に評価できる指標として活用できることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今後、地域で暮らす医療的ケア児数はますます増加していく可能性が高い。HNQICを開発し、在宅看護ケアの効果を客観的に評価することが可能となれば、医療的ケア児と家族への質の高い在宅看護を提供することができる。また、HNQICは、訪問看護事業所が自己評価することで、自事業所の課題の明確化や今後の取組につなげることができ、PDCAサイクルに基づいた訪問看護事業所の質改善に有用であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop the Home-visit Nursing Quality Indicators for Children with medical complexity (HNQIC) based on Donabedian's SPO framework. The first stage of the research examined the extraction of the quality Indicators and examine their usefulness using the Delphi method, and the second stage examined the reliability and validity of the quality Indicators using a questionnaire survey. As a result, the "Structure" and "Process" sections included 28 items in 5 factors, and the "Outcome" section included 7 items in 3 factors. The findings suggested that the HNQIC can be used as a quality indicator to access care effects objectively to provide better support.

研究分野：在宅看護学

キーワード：小児訪問看護 医療的ケア児 質評価指標

1. 研究開始当初の背景

近年の周産期医療の進歩に伴い、地域で生活する医療的ケア児の数は増加傾向にある¹⁾。医療ニーズが高い子どもの病態は複雑であり、解剖学的・生理学的基盤が未熟なため、日々の体調管理を欠かすことができない。また、子どもは成長発達する存在であるため、保健・医療・福祉・教育が連携し、子どもの療育支援を行っていく必要がある。しかし、小児在宅医療の現状は、ライフステージに応じた一貫した相談支援を行うコーディネーターの不在や小児受け入れ可能な地域医療機関や社会資源が不足しているなどの問題が山積している。このような背景から、平成26年「地域における医療及び介護の総合的な確保の促進に関する法律」において、高齢者に限らず、医療的ケア児とその家族においても「地域包括ケアシステム」を構築していくことが必要であるとされ、様々な取り組みが行われ始めている。

地域で生活する医療的ケア児と家族が安心して生活を送るためには、医療的視点と生活支援の両方の視点をもつ訪問看護事業所の役割は大きい。しかし、医療的ケア児へのケア方法は専門性が高く特有であることから²⁾、医療的ケア児の受け入れ体制がある訪問看護事業所は全訪問看護事業所の半分以上を満たない³⁾。全ての地域の訪問看護事業所において、質を保ちながら、子どもと家族に対してより良い支援ができるためには、訪問看護事業所の標準的指針となるような質評価指標を検討することが必要である。

医療のサービス質評価は、Donabedian が提唱した「ストラクチャー（機関構造の評価）」、「プロセス（ケアの方法や内容に対する評価）」、「アウトカム（ケア結果の評価）」⁴⁾に基づいて検討がなされている。わが国においても、Donabedian の構成要素を用いた質評価指標開発の研究は多く、訪問看護事業所の質評価指標は、看取りや医療ニーズの高い療養者への看護や高齢者家族への看護、摂食・嚥下障害の看護等の質評価指標が開発されている。直近では、2019年に開発された「事業所自己評価ガイドライン第2版」（以下、ガイドライン）があり⁵⁾、小児への療養生活への支援に関する指標項目もみとめる。しかし、この「ガイドライン」は、あらゆるライフステージに合わせた指標項目となっており、医療的ケア児と家族に特化した訪問看護の質評価指標には至っていない。

訪問看護事業所のサービス質評価指標を開発し、在宅看護ケアの効果を客観的に評価することが可能となれば、医療的ケア児と家族への質の高い在宅看護を提供することができる。また、訪問看護事業所のサービス質評価指標は、訪問看護事業所が自己評価することで、自事業所の課題の明確化や今後の取組につなげることができ、PDCA サイクルに基づいた訪問看護事業所の質改善に有用であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、訪問看護事業所のサービス質評価指標項目の抽出とその有用性を検討する調査1と訪問看護サービス質評価指標の信頼性・妥当性の検討を行う調査2から構成されている。

1) 調査1の研究目的

医療的ケア児と家族を支援する訪問看護事業所のサービス質評価指標項目の抽出とその有用性を検討することを目的とした。

2) 調査2の研究目的

医療的ケア児と家族に対してより良い支援ができるために、SPO の概念枠組みに基づいた訪問看護事業所のサービス質評価指標 (HNQIC) の開発に取り組み、HNQIC の信頼性・妥当性を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

1) 調査1の研究手法

①対象者

小児への訪問看護を先駆的に行っている訪問看護事業所の管理者 22 人 (回収率 45.8%)

②調査期間

第1回目の調査は2018年9月、第2回目の調査を同年12月

③調査方法

半構造化面接から得られた「ストラクチャー」の「事業所の基盤整備」22項目、「プロセス」の「専門的なサービス」15項目、「多職種・多機関との連携」11項目、「まちづくりの参画」11項目、「アウトカム」11項目の計70項目に対して「項目の重要性」と「表現のわかりやすさ」について5段階で評価するよう、郵送による自記式質問紙調査を行った。分析は、デルファイ法を2回行った。コンセンサスの基準は、指標項目の「項目の重要性」と「表現のわかりやすさ」に対して5段階のうち4以上と回答した人の割合が80%以上と設定した。

2) 調査2の研究手法

①対象者

調査対象は、小児への訪問実績がある2685訪問看護事業所の管理者に往復はがきで調査協力を依頼した。調査協力が得られた訪問看護事業所110カ所であり、そのうち回答があった訪問看護事業所は57カ所であった (回収率51.8%)。

②調査期間

2019年8月～12月

③調査方法

訪問看護事業所の管理者に調査の趣旨や倫理的配慮等を記載した依頼文、調査票、返信用封筒を郵送し、返送は調査対象者から直接研究者宛とした。

調査内容は、調査1の結果で明らかになった「ストラクチャー」の「事業所の基盤整備」8項目、「プロセス」の「専門的なサービス」10項目、「多職種・多機関との連携」9項目、「まちづくりへの参画」3項目、「アウトカム」8項目の合計38項目である。

分析方法は、項目分析、探索的因子分析、クロンバックの α 係数、共分散構造分析を行った。

3) 倫理的配慮

調査1と調査2とも所属機関の倫理審査委員会の承認を経て実施した。

4. 研究成果

1) 訪問看護事業所のサービス質評価指標項目の抽出とその有用性

1回目は22人より回答があり(回収率45.8%)、「ストラクチャー」、「プロセス」要素の59指標項目に対して加除修正し、「ストラクチャー」、「プロセス」要素は34指標項目となった。2回目は19人より回答があり(回収率86.4%)、1回目の34指標項目に「アウトカム」要素11指標項目を追加したものに対して、加除修正し、「ストラクチャー」要素の「基盤整備」が8項目、「プロセス」要素の「専門的なサービス」が10項目、「多職種・多機関との連携」が9項目、「まちづくりの参画」が3項目、「アウトカム」要素の指標項目が8項目の合計38項目の指標項目に対してコンセンサスが得られた。

2) 訪問看護事業所のサービス質評価指標(HNQIC)の信頼性・妥当性

項目分析で1項目削除した「ストラクチャー」、「プロセス」の31項目の探索因子分析(重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転)を行った結果、5因子28項目が抽出され、〈子どもの成長・発達促進と生活を支える支援〉〈多職種・多機関との連携・協働〉〈安全なケアを行うための基盤整備〉〈円滑で切れ目のないケアの提供〉〈事業所の訪問体制整備〉と命名した。項目分析で1項目削除した「アウトカム」9項目の探索因子分析(重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転)を行った結果、3因子7項目が抽出され、〈家族の生活状況変化〉〈家族の子どもへの対応能力変化〉〈子どもの安定した在宅生活継続の変化〉と命名した。「ストラクチャー」「プロセス」全体のCronbach's α 係数は0.929、「アウトカム」全体のCronbach's α 信頼係数は0.762であった。医療の質評価モデルの構造的妥当性の検討を行うために共分散構造分析を行った結果、適合度指標は、 χ^2/df 値 1.41, GFI.897, AGFI.794, CFI.926, 決定係数 $.14 \leq R^2 \leq .68$ であった。

本研究は、構成概念妥当性を検討するために探索的因子分析を行い、医療の質評価モデルの構造的妥当性を検討するために共分散構造分析を行った結果、統計的妥当性も確認され、モデルの適合度指標も許容範囲であると判断した。また、信頼性も統計的に許容範囲であることが確認され、医療的ケア児と家族を支援する訪問看護のサービス質評価指標は、より良い支援ができるためのケア効果を客観的に評価できる指標として活用できることが示唆された。

〈参考文献〉

1) 厚生労働省科学研究成果データベース. “医療的ケア児に関する実態調査と医療・福祉・保健・教育等の連携促進に関する研究” <https://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/NIDD00.do?resrchNum=201616012A> (参照 2019-11-30)

- 2) 松澤明美, 白木裕子, 連 利博, 他. 茨城県北・県央地域の訪問看護ステーションにおける小児訪問看護の実施状況と課題. 茨城キリスト教大学看護学部紀要 2015; 7 (1):19-27.
- 3) 沢口 恵, 山路野百合, 大田えりか, 他. 訪問看護を利用している小児の利用者数と医療的ケアの実態. 日本在宅ケア学会誌 2019; 23 (1): 47-53.
- 4) Donabedian, A. Some issue in evaluating the quality of nursing care. American Journal of public health 1969; 59 : 1833-1836.
- 5) 一般社団法人全国訪問看護事業協会. 平成 27 年度老人保健健康増進等事業 医療ニーズの高い療養者の在宅生活を支援する訪問看護ステーションの在り方に関するシステム開発及び調査研究事業 訪問看護ステーションにおける事業所自己評価のガイドライン. 東京: 一般社団法人全国訪問看護事業協会, 2016.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 阪上由美、宮川哲夫、芝崎伸彦、小平由美子、石川武雅、小西かおる	4. 巻 25 (3)
2. 論文標題 地域で暮らす難病や障害をもつ子どもへの呼吸ケアを考える パート4 ~子どもの暮らしの中での呼吸ケアを実践しよう! ~	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本難病看護学会誌	6. 最初と最後の頁 285 - 286
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阪上由美、小平由美子、諏訪亜季子、西村潤子、芝崎信彦、井上恵利香、古賀美寿紀、王子佩、横山優美、小西かおる	4. 巻 24(2)
2. 論文標題 交流集会4「地域で暮らす難病や障害をもつ子どもへの療育を考える パート3 - 子どもへの看護に療育の視点を取り入れて実践しよう! -」を終えて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本難病看護学会誌	6. 最初と最後の頁 167-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阪上 由美	4. 巻 23
2. 論文標題 「難病や障害をもつ子どもと家族の未来を考える パート2 - 子どもの家族が地域で働く看護職に求めること -」を終えて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本難病看護学会誌	6. 最初と最後の頁 144 - 145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 阪上由美、小平由美子、白井文恵、中山直子、小西かおる
2. 発表標題 医療的ケア児と家族を支援する訪問看護のサービス質評価指標の開発と信頼性・妥当性の検討
3. 学会等名 第68回 日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 阪上由美、小平由美子、西村潤子、藤本優子、中村千賀、秋山正子、白井文恵、小西かおる
2. 発表標題 Developing methods of evaluating of Quality Indicator for Children requiring Home-Visit Nursing in Japan: Considering the Validity of Contents using Delphi Method
3. 学会等名 23rd EAST ASIAN FORUM OF NURSING SCHOLARS (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阪上由美、宮川哲夫、芝崎信彦、小平由美子、石川武雅、小西かおる
2. 発表標題 地域で暮らす難病や障害をもつ子どもへの呼吸ケアを考える パート3 ~子どもの暮らしの中での呼吸ケアを実践しよう!~
3. 学会等名 第25回日本難病看護学会第8回日本難病医療ネットワーク学会合同学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 阪上由美、玉置ふみ子、神谷宣、稲葉典子、長谷川初美、松原照美、児玉秀樹、高岡寛明
2. 発表標題 地域で暮らす医療的ケアの子どもたちと家族を支える看護職の看々連携構築に向けた研修会の有用性
3. 学会等名 第1回日本在宅医療連合学会大会(東京)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阪上由美、小平由美子、諏訪亜季子、西村潤子、芝崎信彦、井上恵利香、古賀美寿紀、王子佩、小西かおる
2. 発表標題 地域で暮らす難病や障害をもつ子どもへの療育を考える パート3 ~子どもへの看護に療育の視点を取り入れて実践しよう!~
3. 学会等名 第24回日本難病看護学会学術集会(山形)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 阪上 由美
2. 発表標題 医療的ケアのある子どもや家族を支援する訪問看護事業所に必要なサービス質評価の開発に向けた構成要素の抽出
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 阪上由美
2. 発表標題 医療ニーズの高い子どもや家族への訪問看護サービス質評価指標の開発（第一段階）
3. 学会等名 第22回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小平 由美子 (KOHIRA Yumiko) (30554886)	岐阜医療科学大学・保健科学部・講師 (33708)	
研究分担者	小西 かおる (KONISHI Kaoru) (60332376)	大阪大学・医学系研究科・教授 (14401)	
研究分担者	白井 文恵 (SHIRAI Fumie) (50283776)	森ノ宮医療大学・保健医療学部・教授 (34448)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------